

四阿山頂上(2333m)付近の草付のなかに産す。

草丈10cm以内の小草で、花色は全くの紫色。

花季は9月の終り 1966.9.28 採。

シロバナグンナイフウロ

Geranium eriostemon FISCHER

var. *reinii* MAXIMOWICZ

form. *alba* MIZUSHIMA

グンナイフウロの花色が純白のもの

四阿高原の十ノ原林道と長野県薬草園下の道とが交差するあたりの草原。

1967.6.22 採

木曾谷で問題になる二、三の植物

奥 原 弘 人

はじめに

地方でこの道に志す者にとっては分類の問題に悩まされる。特に記載に合わないような形の物に出合った時は最も困る。タンポポやアザミについては何所でも難問の一つとされているようであるが、木曾谷ではこれが複雑で一そうその感を深くする。この他ヤマハッカ属についても変った形のものがある。これらについては現在同定を依頼しているが、問題としている点を申上げてみる。

ヤマハツカ属

木曾の南部にはイヌヤマハッカかタカクマヒキオコシかと思われるものがある。両者の違いは苞と萼歯の形にあり、前者は伊豆、箱根、富士周辺に産し、後者は関東以西、四国、九州にわたって広く分布しているようである。これについて浅野氏から信州産のものはイヌヤマハッカとは違うらしいと指摘されたが、苞や萼歯の形はタカクマヒキオコシに近いようでもあり、分布的にもこの方が無難であるが、今後の問題としている一つである。

アキチョウジの分布は一般には美濃以西となっているが、奥山氏の図鑑の分布図には木曾福島の辺に印がある。私もこの分布に注意してきたが木曾で普通に見られるのはセキヤノアキチョウジでアキチョウジは南部の低地でのみ見られた。しかし、南部でも少し山手へはいると、セキヤノアキチョウジの方であった。この兩種の区別は花柄の状態と萼齒の形によるわけであるが、分布の接点では、どちらへ入れたらよいか困るようなものが見られる。これをどう扱ったらよいであろうか。

関東・中部地方北部と東北地方に分布するカメバヒキオコシは筑摩山脈まではきているが木曾谷までは、はいっていないようである。その変種であるコウシンヤマハッカとハクサンカメバヒキオコシは木曾谷でも見られるが、この間にも前例のようなものに会えることがある。前者は甲斐、信濃を分布域とし木曾でも東部・中部に広く見られ、後者は北陸西部の要素とされていて木曾でもそれに近い西部県境寄りで見られる。ところが北部の三岳村・開田村やその北隣の奈川村等の分布の接点には兩種の混生がみられ、中には、どちらへ入れたらよいか判定に困るもの、又は一つの株から両形に分けられるようなものが出ていることもある。この二つは近縁で交雑も可能であろうからそれによるものとも思われるが問題になる形である。

タンボボ類

木曾谷のタンボボは複雑である。シロバナタンボボは南部の低地で見られる。北日本に一般的なエゾタンボボは木曾でも北部や中部で見られるが、次の幾つかの形が村落の附近で見られるのに対し、これはむしろ山地、草原というような所で見られ、個体数も松本平などに比して、はるかに少い。これに対し西日本に一般的なカンサイタンボボも見られ、小泉秀雄氏は上松小川がその北限であると述べている。今日まで木曾のタンボボとして認められてきたのは以上三種であるが、これだけに止まらないうところに問題がある。

関西タンボボは上松小川より北方に及んでいるが、その辺にはセイタカタンボボと見られるものが混っている。この種は美濃での産は知られず、その南隣と西隣の地方に分布することになっているので、東隣の木曾の産は問題とされよう。

中部から北部にかけてカントウタンボボかヒロハタンボボ(トウカイタンボボ)かと見られるものが、相当数見られる。この兩種は大へん似ているので判別に苦しむが、南関東、東海、南紀にわたって分布する後者とした方がよいであろうか。

又総苞がキツネタンボボに近いものが北部で時折見られる。キツネタンボボは箱根に産し小形であるのに対し、これは中又は大形であり、分布上からも木曾産をキツネタンボボとするには無理があると思う。別にキソタンボボとでも名づけたい形である。

尚木曾の南部には分布の上からはカンサイタンボボが多い筈であるが、黄色種が極めて少なく、

山口地区にはシロバナタンポポのみであり、他の地区でも植えたとしか見られないように黄色種が非常に少ないのは何故であらうか。

裏白のアザミ類

木曾では葉裏白色のアザミに各様の形が見られる。この類で、今日まで知られているのはウラジロアザミ（ノリクラアザミ）とウラジロカガノアザミである。私も最近この類に興味をもって調べているが、前者は北部の山深い谷間に普通であり、後者は昭和の初年上松五合目で古瀬義氏によって発見されたものであるが、木曾山脈の山深い所では各地で見られた。最近浅野氏によって飯田松川入で発見されたキソウラジロアザミは大へんこれに似ていて区別はむづかしい。

この谷の北部でウラジロアザミを観察していると、その変化の著しいことに当惑する。

葉では形、裏白の程度、総苞片では形や色等、ナンブアザミかタイアザミと交雑したものではないかと思われるものが多い。また西部の王滝辺のものは葉が深裂し茎や花も少し細めである。奈良井上流の川入国有林では総苞片に1～2の刺のあるものが見られる。

阿寺山地のものは又違っている。一見すればウラジロカガノアザミのように見えるが、花期がそれより1カ月もおそく、総苞片も彼より鋭尖で刺状となり、側方の刺も長くかつ多数（2倍位）である。これは一応アテラアザミと仮によんでいる。

尙阿寺山地の南端、田立滝辺で見られるものは、これとウラジロカガノアザミとの中間の形であるが、「岐阜県の植物」で井波氏は、この地点の西側、裏木曾の山地にキソウラジロアザミがあるとしているのは、この形であらう。

木曾の東部山地にはハリカガノアザミが小区域で見られるが、この種の総苞片の刺はウラジロカガノアザミの、それによく似ていて種の発生の上で何か関係がありそうに思われる。